

作物名：きゅうり
病害虫名：ホモプシス根腐病（病原：*Phomopsis sp.*）

1 被害の特徴と診断のポイント



写真1 地上部の病徴



写真2 根に形成された偽子座

(1) 地上部(葉・茎)の病徴

- ・ 摘芯ないし収穫期以降に病徴が発現することが多い。
- ・ 葉ははじめ生気を失い、晴天の日中には萎凋するが、朝夕や曇雨天日には回復する。これを繰り返して下葉から徐々に枯れ上がる。
- ・ 側枝の発生が抑えられ、草勢が衰えて着果や果実の肥大が不良になる。

(2) 根の病徴

- ・ 根ははじめ淡褐色や褐色になり腐敗する。
- ・ 病徴が進むと、根の表皮付近に針先ほどの微小黒点（疑似微小菌核）や不整形で中心が灰白色の黒色帯状病斑（偽子座）が確認される。

2 伝染源・伝染方法

- ・ 本病菌は被害葉上で越冬し、分生子と子のう胞子を生じ、分生子が飛散し雨滴により伝染する。
- ・ 葉の病斑上の分生子は風や雨滴（水滴）によって飛散し、二次伝染を繰り返す。
- ・ 本病菌は純寄生菌であり、生きた植物体上でしか生活できない。
- ・ 本病菌はかぼちゃを侵さないが、かぼちゃを侵す菌はきゅうりやその他のウリ類を侵す。

3 発病しやすい条件

- ・ 病原菌は被害植物の残さとともに土壌中に残存し、伝染源となる。
- ・ 伝染方法は土壌伝染である。
- ・ 寄生宿主はウリ科作物(カボチャ、きゅうり、メロン、スイカなど)である。

4 防除方法

(1) 発生が確認された場合

- ・ 生育中の地温の低下や著しい土壌の乾燥を避け、根の成長を促進し、被害の軽減を図る。
- ・ 枯死した株は、早期に抜き取り焼却処分する

(2) 次作に向けて

- ・ 本病の発生したほ場の耕起、整地等を行った作業機は、そのまま無病ほ場に使用すると、付着した土壌によって汚染される恐れがあるため、作業機に付着した土壌は洗い落とす。
- ・ 耕作後は土壌くん蒸剤による土壌消毒、太陽熱消毒（夏期）、土壌還元消毒等の防除を実施する。

- 耐病性台木は被害軽減に有効ではあるが、台木品種で本病を完全に回避できるものはない。

5 その他

- 本県では、2005年にキュウリホモプシス根腐病が確認されており、2009年にはメロンホモプシス根腐病も確認されている。

6 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）